

植調剤を利用した局部全摘果と群状結実との組み合わせによる青島温州の連年結実技術

農業研究センター 果樹研究所 常緑果樹部

研究のねらい

高糖系温州は、果実品質は良好であるが隔年結果しやすく、着果量が少ないと大玉になりやすい傾向がみられる。そこで、青島温州を用いて、フィガロンとエスレルの混用液散布による局部全摘果と群状結実との組み合わせによる高品質果実の安定生産法について検討した。

研究の成果

1. 前年結実させた枝に、平成4年5月28日(満開後18日日)にフィガロン1,000倍とエスレル2,000倍の混用液を直径2~3cmの枝単位に散布し、7月22日に残った果実を全摘果した。前年に全摘果した枝は群状結実させた。全面結実区は、7月中旬、8月中旬に間引き摘果を行った。各区ともに9月下旬に仕上げ摘果を行った。
2. 全面結実樹に比べ、全摘果した枝は翌年の著花数が多く、特に直花が多かったが、群状結実させた枝は、翌年の着花数が少ない傾向を示した。
3. フィガロン1000倍とエスレル2000倍の混用液を直径2~3cmの枝単位に散布すると、直果・有葉果とも落果が著しく、十分な摘果効果がみられた。前年に群状結実させた枝では、翌年の着花数が少なくなるため、植調剤の散布による全摘果が効率的に実施できた。
4. 全面結実区に比べ群状結実区で、果肉歩合と糖度が高くクエン酸の低い高品質果が得られ、収量も多かった。
5. 以上のように、群状結実及び植調剤(フィガロン+エスレル)による局部全摘果により、摘果の省力化が可能となり、収量の増加と品質向上効果がみられた。

普及上の留意点

1. 群状結実、局部全摘果させる枝は、全体の側杖数のそれぞれ3分の1程度を目安に設置する。
2. 植調剤による局部全摘果は、一次落果のピーク前後(満開15~20日後)に散布を行う。
3. 生理落果期に気温が高い場合には薬剤摘果は効果的にできるが、気温が低い場合には効果のバラツキがみられるため、散布後の摘果を確認し、全摘果枝で摘果が必要な場合は7月中に終わるようにする。
4. 樹勢が弱っている場合は、落葉の増加が心配されるため散布は控える。

表1 前年処理樹の着花状況

処理区	枝の区分	葉花比	有葉花率(%)
群状結実	全摘果枝	1.8	20.9
	全結果	11.1	49.1
全面結実	-	8.8	55.7

表2 フィガロンとエスレルの混用液散布による局部全摘果効果(円)

処理区		結実数(個)		落果率 (%)	葉果比		落葉率 (%)	旧葉率 (%)
		散布前	散布後		散布前	散布後		
散布区 (前年結実)	直果	19.4	0.4	95.5				
	有葉果	9.0	1.4	74.3				
	全果	28.4	1.8	87.4	11.6	94.5	11.7	61.2

無処理区 (前年全摘果)	直果	50.4	11.6	70.3				
	有葉果	11.2	7.1	31.4				
	全果	61.7	18.7	62.1	5.7	13.7	11.8	68.0

表3 結実方法別の果実品質と収量

処理区	1果 平均重 (g)	果肉歩合 (%)	Brix	可溶性 固形物	クエン 酸	甘味比	果皮色		収量(kg)	
							a値	a/b値	3年	4年
群状結実	137.4	72.3	13.0	14.55	0.82	17.72	29.4	0.83	103.8	125.0
全面結実	148.2	70.7	12.5	14.04	0.91	15.37	28.4	0.81	84.5	94.6